

「鳳潭肉筆 俱舍論光宝二記」について  
雲華院蔵

村松法文

此の度大谷大学図書館書庫の増設工事に因る未整理古書籍の移動に当って「鳳潭師肉筆、俱舍論光宝二記、雲華院蔵」の箱書のある一箱の筆写本が見出された。これは恐らく高倉学寮から移管されたまま今日に至った未整理本の一部と思われる、実に今日までの長い問衆人の目にふれる機会に恵まれなかったものである。箱は桐箱で内部が上下二段に分れ、「俱舍論光記」の表題を有する十六冊と「俱舍宝記」の表題を有する十五冊を納めている。

「俱舍論光宝二記」とは言うまでもなく「俱舍論記」（唐・普光述）と「俱舍論疏」（唐・法宝述）を指す。前者は普通略して「光記」と称され、後者は略して「宝疏」と称され、共に俱舍論の註釈書としては、唐・神泰述の「俱舍論疏」（泰疏）と共に俱舍論の三大註疏として重視されてきたものである。

「光記」が日本へ伝来された年時は詳かでないが、平安朝時代には既に知られていたということであり、刊本としては元禄十五年（一七〇二）に初めて開版されている。現在はこの他に大正大藏経第四十一巻論疏部二、統藏経一・八四、国訳一切経論疏

部などに収められ、又、別に明治二十年佐伯旭雅校訂本がある、「宝疏」はその撰述年時に於て「泰疏」、「光記」の後にあたるもので、日本への伝来は文徳天皇の天安二年（八五八）円珍によって将来されたという。これも刊本としては宝永元年（一七〇四）に開版され、のち明治二十年に「光記」と共に旭雅校訂本としても出版された。大正大藏経では第四十一巻、統藏経は一・八五に収められている。尚、この「宝疏」は将来当時十五巻本で、その中の十二・十四・十五巻が欠本であったといわれ、十四・十五の両巻はやがて補われたが、巻十二ははるか降って大正六年、石山寺で延宝三年の覚樹本が発見されるまで欠本となっていた。従って大正大藏経に至って全巻収められることになったが、それ以前の版本には巻十二を欠いている。大正九年刊の佛教大系所収の俱舍論には「光記」「宝疏」が会本とせられ、研究者の比較検討に便利なものとなっている。

さて、此の度見出された二本はいづれも写本であるが、各々奥書があり、筆写の年時・場所及びその時の感想を披歴した詩などが記されている。一本が納められていた箱に「鳳潭師肉筆」とあった如く、各巻の奥書には「僧潛菊潭」の名が見出される。「光記」は十六冊中、四冊目の巻五、「宝疏」は十五冊中五冊目（巻六・七）、七冊目（巻十・十一）八冊目（巻十三・十四）十三冊目（巻二十四・二十五）、十四冊目（巻二十六・二十七）を除き他は皆同筆であって、前記諸巻とは筆跡を異にし、皆「僧潛菊潭敬写」と記されている。

鳳潭、名は僧潛。華嚴宗の人で山城華嚴寺の開山である。江

戸時代中期の佛教の学問研究の中で浄土宗の普寂、真言宗の慈雲、真宗の慧海・法幢、天台宗の慈山・光謙などと共に博覧の者宿として名声一世に高く、特に復古的学風に立って多くの宗派と論争し、峻烈な論難を交したことは普ねく人の知る所である。鳳潭の伝記資料としては弟子の覚洲(宝暦六年(一七五六)歿)の作になる「大日本華嚴春秋并伝」(宝暦五年(一七五五)述)があり、基本的資料となっている。この伝によると、鳳潭は万治二年(二六五九)摂津国難波に生まれ(一説には明暦三年(二六五七)生、又、越中国埴生村の人という)、元文三年(二七三八)に歿した。延宝二年、十六歳で法雲寺の慧極の門に入り、次いで瑞龍和尚鉄眼に師仕して法諱僧潛、法字菊潭の名を得た、鳳潭の名はその後宝永六年(一七〇九)、五十一歳の時に改めてつけたものである。青年期は南都の興福寺・東大寺に遊学して所伝の古蹟典を求め、唯識論述記・瑜伽論略纂・同倫記・法苑義林章・法華經光宅疏・三論疏・華嚴搜玄記・同孔目章・同探玄記・俱舍論光記・宝疏等を書写した。又、元禄六年三十五歳で泉涌寺雲龍院恵応について受戒し、同八年、叡山安樂院光謙について天台三大部を聴いたという。その著作は甚だ多く存する。南部を遊学した折に見出した多くの古書は「扶桑殿外現存目録」として記録されている。

「華嚴春秋」によって見るに彼は貞享四年(二六八七)東大寺清涼院で「俱舍論光記」及び「宝疏」を伝写したという。これにより鳳潭が「光記」「宝疏」を書写したという史実を裏書する資料として、そのことの奥書を有する二本が現存することは

注目に値すると言ってよい。しかし、これがはたして直ちに鳳潭自身の書写本であるかどうかは未だ忽卒に決めることはできない。

この筆写本を雲華院が秘藏していたとせられているが、その雲華院とは真宗大谷派の第九代講師雲華院大舎(安永二(一七三三)―嘉永三年(一八五〇))のことであることは疑いない。箱に「鳳潭師肉筆」といつているが、これはこの本の奥書の署名を見て大舎がそう断じたものと思われる。今ここでは箱書のままに此の度の「光記」「宝疏」を一応「雲華院藏本」と呼び、特に私の見て深い興味を覚えた奥書を中心にしていささか紹介を試みたいと思う。

先ず「光記」についていえば、内題には「阿毘達磨俱舍論記、沙門釈普光述」という。論本第一分別界品第一之一から論本第三十破執我品第九之二までを三十卷、十六冊で収めその体裁は現行刊本及び大正大藏經本の巻数、品数と一致し、内容区分も差異はない。但、「論本第何」という見出しを欠いている。特に、この十六冊中、四冊目巻五は欠本を後で補ったものに相違なく他の諸冊とは明らかに異筆であり、奥書もない。これに対して他は皆同筆であるように、各々奥書を有する。その奥書の中には、書写の年代と場所及び書写者僧潛菊潭の名と感想の詩文とが記録されている。その中、書写年時とその書写場所とをまとめてみると表1の如くなる。

これから気づくことは、

(一)書写年時は貞享四年(二六八七)から元禄二年(二六八九)までの

俱舎論光記筆写年時・場所

〔表1〕

冊数	巻数	筆写年時	光記・宝疏 を通しての 筆写年順	筆写場所
1	1, 1の余	元禄1 (1688)11月	3	洛山鴨川之旅邸
2	2			
3	3, ④	貞享4 (1687)11月上旬	2	南都 極楽院
4	5			
5	⑥ ⑦	⑥元禄1 (1688)11月中旬 ⑦元禄1 (1688)12月中旬	3 3	
6	⑧, 9	貞享5 (1688)2月	3	
7	⑩⑪⑫	⑩貞享5 (1688)3月 ⑪貞享5 (1688)1月上旬 ⑫貞享4 (1687)11月15日	3 3 2	黄檗 宝藏院 南都 極楽院南堂 極楽院
8	⑬ ⑭	⑬貞享5 (1688)5月 ⑭元禄1 (1688)12月2日	3 3	極楽院 京師 貴華堂
9	⑮	元禄1 (1688)12月8日	3	洛山鴨河之客膝斎
10	16, ⑰	元禄1 (1688)10月	3	
11	⑱ ⑲	⑱元禄2 (1689)1月1日 ⑲元禄2 (1689)1月15日	4 4	
12	⑳ ㉑	⑳元禄2 (1689)1月 ㉑元禄2 (1689)1月		摂国難波 徳春庵
13	22, ㉓	貞享5 (1688)5月	3	南都 極楽院
14	㉔ ㉕	㉔貞享5 (1688)4月 ㉕貞享5 (1688)5月	3 3	極楽律院東堂
15	㉖ ㉗	㉖元禄2 (1689)1月 ㉗元禄2 (1689)1月	4 4	難波 徳春庵
16	㉘29㉚	㉘元禄2 (1689) ㉚元禄2 (1689)1月	4 4	難波 徳春庵

(○印は奥書の有る巻)

三年に互っていること。  
 (二)書写場所が、①南都極楽院(西大寺) ②黄檗宝蔵院、③難波  
 徳春庵、④京師貴華堂、⑤洛山鴨川之旅邸と推移しているこ  
 と。

(三)筆写の順序が巻の初から順次に進められたものでなく、前後

錯雑していること、あたかも手当り次第であるかの感あるこ  
 となどである。

先に「華厳春秋」によって鳳潭の伝に触れた際、貞享四年に  
 東大寺清涼院に於て「光記」「宝疏」を書写したと記されてい  
 たことを述べたが、実際はここに見られる如く貞享四年に終つ

たのでなくその後三年に亙って書写が完了したのであった。

次に筆写場所についていえば、①極楽院については「華嚴春秋」によると元禄三年（一六九〇）鳳潭三十二歳の時に「因明大疏鈔」を書写していると記されているから、無関係でないことが知られる。又②の宝蔵院は、これは師の鉄眼所住の寺であり、鳳潭もここに居たことが「華嚴春秋」に伝えられているから、今問題はない。しかし、以上二ヶ所以外の③京都貫華堂、及び④徳春庵については今私にはわからない。もっとも鳳潭が京都に住したことは疑いないし、難波の生まれであると伝えられているから、その縁りの所には違いないがそれが現在のどこにあるか明かでない。

しかし鳳潭が自ら詩を作ってこの本の書写をなし得たことにつき一巻毎に喜びを述べているが、大切な宝とこの書を讃じていることや、又、書写を許されなかつたために白衣に書いて書庫からこっそり持ち出したという逸話（後述参照）のあることなどから察して、そのように貴重な本がはたしてあちらこちら持ち歩くことが許されたのかどうか不審がないではない。又、巻によって原本の所蔵場所が違ったとしても、旅宿で書写しているということから見れば、持ち歩いていたらしく思われ、寺院で書写しているのとは異なるようである。

次に、筆写の順位が巻の次第によっていないということはどういうことであろうか。そうとすれば雲華院蔵本は後で整理、製本されたことになる。これらのことからして、この筆写本の原本は極楽院、龍蔵院など一ヶ寺に所蔵されていたものかどうか

か。或はそれぞれの所で別々に伝えられていたものではないかという疑問が残る。これら筆写についての疑問は多いが、今、いずれとも断定することは出来かねる。

次に、鳳潭の作になる詩文の中から、彼の筆写に対する熱情の感ぜられるいくつかにつき、私の見た限りその一端を紹介したいと思う。詩はすべて二十三あり、七言或は五言絶句より成る。彼がこれを書写したのは実に二十九歳から三十一歳という若さであるけれども、その若さにかかわらず単に精進努力だけでなく学問的識見の卓抜なることは驚歎の外ない。即ち、詩は大體、この「光記」を書写することの出来た喜びと、後世に法宝を弘通せんと願ひ、及び「俱舍論」研究の上で「光記」「宝疏」は重要なものであるにかかわらず、これを学ぶ者のないことの歎きを叙べ、今書写することによってそれを永く伝え祖師の恩に応えんとするものであるとしており、その心意気は当代の学界を睥睨する観がある。今、その中から二、三を紹介すると、

卷七（五冊目）の末尾に

世親大士立終宗 光宝相扶各樹功

後世只驚烟海遠 須觀北斗倚天宮

という。世親の俱舍論に対して「光記」「宝疏」は相俟って指針となるものであるが、世間では俱舍論の註釈書といえれば円暉の「俱舍論頌疏」を専らにし、「光記」「宝疏」は看却せられてきたことに対する憤懣が感ぜられる。

又、卷十三（八冊目）に

聖去代移時運遼 金言剝蝕誰加琢

拭眸頻写若干編 為令將來登正覽

といひ、卷二十三(十三冊目)に

芷白蘭紅湘水浜 千年波底沉靈均

縉門無意為文巾 日写金編結勝因

という。これ「光記」「宝疏」の勝れた宝ありながら佛教界がこれを学ぶことなく久しく埋れさせていることに対して深い慨歎を禁じ得なかつたことを切々と訴えている。彼が当時の学界に於て復古派の一巨頭であり、特に、佛教界の革新的熱血漢であつたことを物語るものと言えるであらう。

次に、卷十四(八冊目)に

朔風徹骨腕頭寒 筆凍墨冰楮几間

還憶古人親切处 崎嶇雪嶺幾重難

といひ、卷二十四(十四冊目)に

湖筆頻馳写法門 尤嘉名教可長存

割筋折骨何堪惜 一片赤心答祖恩

とあるのを注意したい。前者は元禄元年十二月の書写、後者は貞享五年四月の書写。寒さ骨髓に徹する冬夜に一卷を書き終えてはそれを将来伝持した古賢の辛酸に思を馳せ、又、筆を走らせて法宝伝持の一助をなし得たことの喜びを思うにつけても、骨を折き筋を割いて正法のために尽した祖恩がひたすらしのばれてならぬという。ここには安易な自己満足や功名心の片鱗も認められぬではないか。

次に、写本の内容を他の諸本と一部分対校を試みた上での所

感を述べてみたい。

大正大藏經所収の「光記」にあつては各卷によつて底本と校訂本が異なるが、今この写本を大正大藏經に校訂してある東大寺古写本と比較してみると文字の異同の点に於ては一致し、この写本の原本が東大寺本であつたと推察される。

第二に「宝疏」については、雲華院藏本は内題を「俱舍論疏」とし「唐佛授記寺沙門法宝撰」としている。全て十五卷あり、後の筆でこれを三十卷の品名に書き変えている。これは現行大正大藏經第四十一卷所収では三十卷となつており、宝永元年刊の版本でも三十卷であるから、この写本はそれらとは異つて古い十五卷の形のものであることが知られる。大正大藏經所収の校訂本の参照から見ても「光記」と同じく東大寺本と同じものであるようである。例えば、撰者名の「唐佛授記寺沙門法宝撰」とあるのが、現行刊本では単に「沙門法宝撰」とあるのと異つていて、このような形も東大寺藏本ものと一致する。しかし、この「宝疏」は先の「光記」に比して後で補充したと思われる異筆が多く、論本第六・七(五冊目)、論本第十一・十二(七冊目)、論本第十三・十四(八冊目)、論本第二十六・二十七(十四冊目)が追加分であり、この補充分は三十卷本の品題に依つてゐる。卷十二分別世品第三之五は古来欠本となつていて、大正六年に石山寺で延宝三年の覺樹本が発見されるまで欠けていた。大正大藏經では石山寺発見の本によつて補充されたので欠本がないが、宝永元年版や続藏經にはもとより欠本となつており、この雲華院藏本でも同様欠本となつてゐる。

写本の卷十は現行本の卷十九、分別随眠品第五之一に当り、共に脱文追加分を有するが、雲華院藏本にあつてはこの部分が後の版本による「脱之一〇九」の九丁で補充されている。この部分は分別随眠品第五之一の最初の部分で、大正大藏經卷四十一、六八七頁b五行目「正理論云」から六九〇頁a十三行の「下八地通」までである。ここの部分は宝永元年の版本を見ると「脱文」として追加してある。しかし、ここで不思議なことに、現在大谷大学図書館には宝永元年版と称するものが三本あつて、二本は「平安城宣風坊書林井上実氏藏板」のものであり、一本は「高野山興山寺藏版」のものであるが、内容は三本とも全く同じものであるに拘らず、前者は二帖目の後に脱之一から脱九までの九丁を追補してあるのに反し、後者にはそれに相当する部分の脱文追加部分がない。この宝永元年版と称するものは竜谷大学図書館にも四部所蔵されており、それを調べる機会に恵まれたのであるが、その中には大谷大学図書館にある「高野山興山寺藏版」と称するものはなく、又脱文部分は初から全て補充されている刊本ばかりであった。宝永元年版の原本については先の如き卷末の記録しかわからないが、しかしこの二本とも内容は一致しているのだから同じ原本であることに違いない。それなのに脱文の補充の有無の別があるのは何故であろうか。補充分のある刊本はいずれも二帖目の枠外に「俱舎論疏十九卷二葉目脱文」とあり「脱一〇九」が入っているが、興山寺藏版のものはこの文がなく追加されてもいない。これらのことから最初の刊本である宝永元年版では未だ脱文部分が発見され

ておらず、その部分を空けて刊行したが、後に発見されて「脱文一〇九」として宝永元年版に補充されたので現在のような二種の宝永元年版が存するのではないかと思われる。或はこの両者は版元が違うので一方は脱文を知らずに落したのであるうか。しかし、脱文の部分は誰れによって、どこで発見されたという記録はないし、又、発見されて補充されたのは宝永元年版の前か後かということも分らない。

刊本についてはこれ位に止め、さて今度は雲華院藏本であるが、この部分は、脱文の前の「論五發業有」まで書いて紙の表、余白あるにもかかわらず止め、脱文の後の「二断若聖人」から紙を改めて書いている。従つて、これを書写した当時原本のこの部分は脱文になっており、書写する中にそれに気づいて紙を改めたものかと推察される。従つて、宝永元年開版の時に既に脱文部分が発見されていたとしても鳳潭筆写時にはそれが発見されていなかつたことは確かである。雲華院藏本ではこの脱文部分を刊本で補充してあるが、それは後世の人が鳳潭筆写本に補充したものであろうか。又、宝永元年開版時に既に脱文部分が発見されていたか、その後発見されて宝永元年版に補充されたかわからないが、宝永元年は鳳潭四十五歳の時であり、この「宝疏」卷十九を筆写した貞享四年から十五年後に当り、鳳潭自身で脱文部分を追加したのかもしれない。しかし、この補充分の刊本は現在宝永元年版と称されるものとは同版でなく、その後の版本と思われるが、何時のものかわからないので断定は出来ない。

俱舍論宝疏筆写年時・場所 [表Ⅱ]

冊数	巻数	筆写年時	宝疏の 通順 記通 光通 筆写	筆写場所
1	①	貞享3(1686)10月	1	東洛 貫華堂
2	②		1	
3	③	貞享3(1686)5月	1	黄檗山 宝蔵禅院
4	4, ⑤	貞享3(1686)11月		
5	6, 7			
6	8, ⑨	貞享3(1686)12月23日	1	
7	10, 11, 12 欠本			
8	13, 14			
6	15, ⑯	貞享3(1686)12月上旬	1	
10	17, 18, ⑰	貞貞4(1687)1月上旬	2	東大寺 龍蔵院
11	20, ⑳	貞享4(1687)1月25日	2	東大寺 龍蔵院
12	22, ㉑	貞享4(1687)2月23日	2	
13	24, 25			
14	26, 27			
15	28, 29, ㉒	貞享4(1687)2月下旬	2	

(○印は奥書の有る巻)

六八七)の二年間であり、「光記」書写より先になる。

(一)書写場所は④東洛貫華堂、⑤黄檗山宝蔵院

(二)東大寺龍蔵院である。

(三)「光記」の如き書写順序に大きな混乱はなく、初巻から順次につづけられているが、中で巻一と巻二だけが逆になっている。

これらも先に鳳潭の伝を「華嚴春秋」で見た際に「貞享四年東大寺清涼院書写」とあるのとは異なる。しかし東大寺龍蔵院については「華嚴春秋」によると貞享三年に「瑜伽論略纂」「瑜伽論倫記」「法苑義林章」等を伝写しているという記録があるから無関係ではない。尚「光記」「宝疏」の筆写年・場所・巻数を書写年の順に整理すると表Ⅲの如くなり、書写巻数の順不同と鳳潭の貞享三年から元禄二年までの四年間に互って書写した居住場所が知られる。

「宝疏」も「光記」と同様、各巻に奥書があり、筆写の年時と場所、著者名、所感の詩文が記されている。その中、書写年時、場所、書写順序については表Ⅱの如くなる。

それによって要約すると、次の如きである。

(一)「宝疏」の書写年時は貞享三年(一六八六)から貞享四年(一

「宝疏」の奥書は「光記」のような詩は少ないが、俱舍論の伝流、「光記」、「宝疏」の入手、佛教学に対する見識などを記している点で興味深い。

巻一之餘の巻末には、次の識語がある。

原夫斯論之流伝者蓋親依始開釈 而後基于梁陳盛于隋唐

俱舍論光記・宝疏筆写順序 [表Ⅲ]

筆 写 年	月 日	光記・宝疏の巻数 ( )は冊数	筆 写 場 所
貞享3 (1686) 丙 寅 (鳳潭28歳)	5月	宝疏2 (2)	
	10月	宝疏1 (1)	東洛 貫華堂
	11月	宝疏3 (3)	黄檗山 宝藏禅院
	12月23日	宝疏9 (6)	
貞享4 (1687) 丁 卯 (29歳)	1月上旬	宝疏19 (10)	東大寺 龍藏院
	1月25日	宝疏21 (11)	東大寺 龍藏院
	2月23日	宝疏23 (12)	
	2月下旬	宝疏30 (15)	
	11月上旬	光記4 (3)	南都 極楽院
	11月15日	光記12 (7)	南都 極楽院
貞享5 (1688) 戊 辰 (30歳)	1月上旬	光記11 (7)	南都 極楽院
	2月	光記8 (9)	
	3月	光記10 (7)	黄檗 宝藏院
	4月中旬	光記24 (14)	極楽律院東堂
	5月上旬	光記23 (14)	南都 極楽院
	5月上旬	光記25 (14)	
	6月	光記13 (8)	極楽院
(9月30日改元) 元禄1 (1688) 戊 辰 (30歳)	10月	光記17 (10)	
	11月	光記1余(1)	洛山鴨川之旅邸
	11月中旬	光記6 (5)	
	12月2日	光記14 (8)	京師貫華堂
	12月8日	光記15 (9)	洛山鴨河之客膝斎
	12月中旬	光記7 (5)	

爾来及迨焚師之再翻 門人三千達者七十 当时深達莫踰光  
 宝二師者 各製本疏 尽善擅美大闡義門之奧蘊 而沐浴後  
 昆之淺識焉 寔功勳以可思議乎 余数載之間遊学南方 適  
 就一房忽獲此二疏不甚(堪?)欣抃 仰讚法宝之入手 俯

回頽風之倒瀾 其功亦莫等基益何有測手 因進而描写遂成。  
 俱舍論が中国に於て初めて訳出されたのは陳代の真諦三蔵に  
 よつてであり、陳の文帝天嘉四年(五六三)二十二卷を広州制止  
 寺に於て訳したのが初めてである。次いで第二訳は唐代の玄奘三



筆写年	月 日	光記・宝疏の巻数 ( )は冊数	筆写場所
元禄2 (1689)	1月1日	光記18 (11)	
	1月上旬	光記26 (15)	難波 徳春庵
	1月	光記21 (12)	
己 巳 (31歳)	1月15日	光記19 (11)	
	1月15日	光記27 (15)	
	1月下旬	光記20 (12)	撰国難波 徳春庵
	1月下旬	光記28 (16)	
	1月30日	光記30 (16)	難波 徳春庵

蔵によって永徽二年（五年）（六五一〜六五四）に訳出された。かくて俱舎論が訳出されるや「俱舎学」はそれまでの「毘曇学」に代る地位を占め、特に玄奘の下には多くの俱舎学者が生まれた。その中でも普光・法宝は神泰と共に傑出した学匠であり、各々

註疏を作った。鳳潭は南部に遊学してはからずも一房でこの二疏を入手し、喜んで書写したのである。しかし、それが全巻であったか否か、それはわからない。もし全巻であったとすると、先に「光記」の時にも触れた如く、一ヶ所でなく各地で書写しているのは何故かと不審に思われる。

次に、巻五では世親の俱舎論によって佛教の深奥を究め、唐代に玄奘の訳（新訳）が出て以来盛にそれが研究されたが、その後これを学ぶ者がなくなり、残念に思っていたとし、今この疏を入手出来たことを喜んでゐる。

又、巻九では

此疏東漸其又久矣 日就月将像教淺末 学者怠懶以日下衰  
 或藉此經疏論解多致紛差 今南京大華嚴寺清涼公者 藏諸  
 篋衍緊守不出 雖然上人以余好學之切 感激而示余以斯疏  
 余不堪欣喜 敬更寫之云々

とあるが、ここで鳳潭がこの疏を入手した経緯が記されている。「大華嚴寺清涼公」というのは先に見た「華嚴春秋」の中の東大寺清涼院で光宝二記を書写したとある記録に符合するのではないかと思われる。巷間に伝えられる如き、光宝二記を白衣の裏に書いてこっそり持ち出したという逸話も、ここには鳳潭の好学の意に感じて与えられたと自分で記していることから推して、事実とは考えられず、単なる伝説に過ぎないと断じてよからう。

巻三十、「宝疏」の書写順序では最後のものであり、全巻書写し終った時の記載であるが、そこでは、

聰明之論學者往々損為沈酣 名相之痼疾其不流伝既久矣  
誠足怪耳 潛在南京近獲光宝二師所撰之疏本 欣喜而寫之  
運筆如飛造次之間而功已成伏且闕焉

其闡明奧蘊滔々弗竭 若偏目舍小就大則不識何以撰群機  
何以度諸幽(幽?)滯 小能兼大无離小之大 大即小 小  
大相既始当无碍 幾庶後昆莫有墨守一辺 援摶群義之弘博  
以為等沙之厭是請思焉。

とあり、鳳潭の佛教学に対する卓抜なる識見がうかがわれる。  
即ち小乗を捨てて大乘のみ学ぶような偏見の態度ではどう  
して多くの機根の衆生を度することが出来ようか。小は能く大  
を兼ねるから小乗は大乘を離れてはなく、小大相即である。だ  
から一方だけに偏することのないようにと主張しているのでは  
ある。八宗を兼学し、全てを古流原始に溯って究めようとした鳳  
潭の面目をありありとうかがえるのではないか。中国以来、大  
乗佛教を専門にする者はほとんど小乗を見ることのないのが通  
常であるが、そういった偏狭な佛教観に対して彼は猛省を促し  
ている。又、鳳潭は光宅寺法雲の「法華義記」を刊行してその  
序を書いているが、その中に於ても、天台がいかにくすぐれてい  
るとはいえ、光宅の「義記」を知らずしてその真価を知ること  
が出来ぬという意味を力説しているのと同じ論旨であり、合せ  
て彼の学究姿勢をものがたるものである。

以上、これまで「光記」「宝疏」の各巻の奥書から、筆写年  
時・場所を整理し、鳳潭の書き添えた詩文からいくつかを紹介  
して彼の「光記」「宝疏」に対する姿勢、入手の事情、佛教学

への態度などをうかがってみた。然るにこの「光宝二記」がは  
たして鳳潭の肉筆であるか否かについては、彼の自筆と照合す  
ることができなかった。今この私には結論し得る所でなかった。  
しかしながら、少なくとも鳳潭が「光宝二記」を東大寺で書写し  
ているという伝は「華嚴春秋」にも見えていることであり、彼  
が俱舍論を学び、自分でも「俱舍論冠註」「頌疏講苑」各十四巻、  
「俱舍論新鈔」一巻という註疏を書いていることから、肉筆で  
ないにしても当時の書写したものを伝えていることは確かであ  
る。従って、又そこに記された鳳潭自身の詩文も鳳潭の人柄を  
知る為の資料として興味あるものといえよう。筆写場所も大体  
鳳潭に関係ある所であり、筆跡そのものの真否は断じ得ないけ  
れども識語等より推してこの書写本は、仮りに鳳潭の肉筆では  
ないとしても、すくなくとも鳳潭自身の書写本に直接もとづい  
たものであることは疑いないであろう。ただ、筆写年時が前後  
四年に亘り、各地でなされていることと、雲華院の旧蔵であつ  
た等の事情より察して後の整理、製本を経たものかとも思われ  
ぬではない。後にこの光宝二記を詳細に読んだ上で、多分元禄  
十五年・宝永元年の版本と対校を経て文字の異同を書き込み注  
記も書いている。これらの書込みも検討する必要があること勿  
論であるが、今はそれに触れることができぬ。更に、筆写年時  
に於て巻数の順序不同なのは何故かということも問題として残  
されている。

以上、実に今日迄の長い間、書庫に眠っていたこの書物をこ  
こに簡単に紹介した。鳳潭がこれを書写した時に、それまで余

り見られなかったことを歎いているが、今又そのものが永く埋れていたので見出されたということに奇しき因縁を感じないではおれぬ。これを機会に鳳潭の望んだ如く、これが識者に注目

せられて俱舎学研鑽の一層隆盛に赴くことは先人のみの喜とする所ではなからうと思ふことである。